

特別支援学校教育実習への期待と不安

—アンケート作成と試行—

藤瀬 教也（教育学部）・岩男 芙美（教育学部）・吉川 寿美（教育学部）

Expectations and Anxieties for Special Needs School Teaching Practice : Questionnaire Development and Trial

Noriya Fujise Fumi Iwao Kazumi Kikkawa

1. はじめに

2015年12月、中央教育審議会答申において、「特別支援学校において特別支援学校教諭等免許状の所持率は、72.7%にとどまっております」、「平成32年度までの間に、おおむね全ての特別支援学校の教員が免許状を所持することを目指す」と示されている。また、「小中学校の特別支援学級や通級による指導の担当教員は、教育職員免許法上特別支援学校教諭免許状の所持は必要とされていないが、」「小中学校の特別支援学級担任の所持率も現状(30.7%)の2倍程度を目標として、特別支援学校教諭免許状の取得を進める」と示されている。

しかし、2022年11月に文部科学省初等中等教育局特別支援教育課より発表された「特別支援教育資料(令和3年度)」によると、特別支援学校における特別支援学校教諭等免許状の保有状況は、全体で86.5%、小中特別支援学級では31.1%となっている。当初目標であった「平成32年まで」を経過した今もなお、実態としては、十分な保有状況には至っていない。

さらに文部科学省は、「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告(以下、検討会議報告)」を踏まえ、2022年3月「特別支援教育を担う教師の養成、採用、研修等に係る方策について(通知)」の中に①「教師の採用段階において、特別支援教育に関わる経験等を考慮(採用試験における加点等)するなどの工夫を行うこと」②「全ての新規採用職員が概ね10年以内に特別支援教育を複数年経験することとなるよう人事上の措置を講ずるよう努めること」や、③「管理職の登用等にあたっては特別支援教育の経験も含めて総合的に考慮する

こと、特別支援学校の教師の免許保有率100%を目指して引き続き取組を進めること」など複数の方針を通知しており、学校現場に特別支援教育の見識を有する教師を増やそうとしている。

検討会議報告には、「特別支援教育を受ける児童生徒が増加し、通常の学級においても、障害のある児童生徒が増加している。こうしたことから、特別支援学校、特別支援学級、通級による指導といった学びの場だけでなく、小中学校等の通常の学級においてこそ『特別支援教育』を推進する必要性が高まっている。」と述べ、「特別支援教育に関する知見や経験は、教育全体の質の向上に寄与することから、学校教育関係者のマインドを改革し、特別支援教育に関わる教師を増やしていくことが、学校教育を変えていくための鍵となるといえる。合わせて、特別支援教育に携わる教師の専門性を担保することも不可欠であり、本報告には、両観点のバランスを勘案した上で、教師のキャリアパスを中心とした具体的方向性をⅣ及びⅤに盛り込んでいる。」と記されている。

また、2022年12月文部科学省は「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」を発表し、小中学校の通常学級で「学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒は推定値：8.8%である」と報告している。これらの社会状況からも、特別支援学校教諭免許取得者の増加と質の向上が益々求められている。

2. 問題と目的

このような社会的状況がありながらも、特別支援学校

表1 特別支援学校教育実習に対する期待と不安

	期待		不安		t 値	p
	Mean	SD	Mean	SD		
教育実習全体	3.26	0.59	3.75	0.47	-5.01	**
児童生徒の実態把握	2.98	0.86	3.78	0.45	-7.00	**
指導案作成	2.43	0.92	3.91	0.34	-11.37	**
教員同士や教員との関係	3.35	0.78	2.78	0.99	3.32	**
教材準備・作成	2.95	0.76	3.49	0.64	-4.03	**
卒業後の就職やキャリア	3.12	0.84	3.03	1.00	0.47	

** $p < .01$

教育実習に臨む学生がどのようなところに不安を持ち、何を期待しているのか、心理的側面に焦点を当てて検討した研究は決して多いとは言えない。

本学教育学部では、2011年に特別支援学校教諭免許の教職課程を設置し、4年次に特別支援学校教育実習を9年間実施してきた。特別支援学校教育実習の実習生数や実習校数の推移と現状については、藤瀬・吉川・岩男(2023)に報告した。報告によると、近年5年間の実習生数は53～63名で推移している。これは1学年約250名のうち、小学校教員免許取得希望者約150名の4割程度である。また、県内の実習校は全体の6～7割程度である。本報告では、実習生の抱える「不安」について実習前後で自由記述を求めた。学生は「実態把握」「指導案作成」「教員との関係」「教材準備」「卒業後の就職・キャリア」に不安が大きいことが示唆された。

そこで本稿では、藤瀬・吉川・岩男(2023)の報告によって特別支援学校教育実習生が抱える実習前の不安が示唆された「実態把握」「指導案作成」「教員との関係」「教材準備」「卒業後の就職・キャリア」の項目について、実習生の「期待」と「不安」を測定する質問紙を開発する。また、測定された学生の「期待」と「不安」について分析し、2022年にコアカリキュラムが示された「特別支援教育に関する科目」や「特別支援学校教育実習指導」などの授業における指導内容や、方法の改善につながる考察を行うことを目的としている。

3. 方法

対象者：特別支援学校教育実習を控える4年次生66名

調査手続き：「特別支援学校教育実習指導」の授業内で、Google Formにて作成したアンケートへの回答を求めた。

アンケートの構成：①これまで特別支援学校に行った回数、②「実習全体」「実態把握」「指導案作成」「教員との関係」「教材準備」「卒業後の就職・キャリア」の各項目について、「期待」と「不安」がどの程度か、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」までの4件法で尋ねた。また、③「実習全体」「実態把握」「指導案作成」「教員との関係」「教材準備」「卒業後の就職・キャリア」の各項目について、「期待」と「不安」の具体的な内容の自由記述を求めた。

4. 結果

(1) 特別支援学校に行った経験

2023年度の特別支援学校実習生は、新型コロナの影響で、2年次に履修した介護等体験実習では、学内での代替措置になったことにより、特別支援学校に一度も行っていない学生が7割以上であった。

(2) 特別支援学校教育実習への期待と不安

特別支援学校教育実習への「期待」と「不安」について、アンケートの各項目への回答を得点化し、各項目の得点の平均値について対応ありのt検定を実施した。結果を表1に示す。

学生の有する特別支援学校教育実習への「期待」と「不安」について、対応のあるt検定を行った。「実習全体」「実態把握」「指導案作成」「教員との関係」「教材準備」「卒業後の就職・キャリア」の各質問項目の「期待」と「不安」について、以下、図1～6に示す。

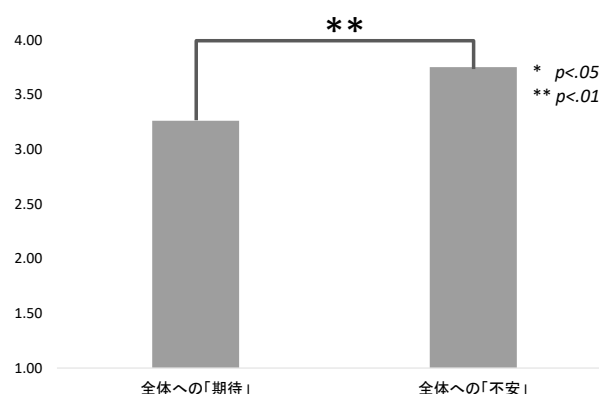


図1 教育実習全体への期待と不安の差

図1より、「教育実習全体」では「不安」の方が「期待」よりも有意に高かった($p < .01$)。

記述内容には、「小学校実習の時に、なかなか時間を取ることができず心残りだった、子ども一人一人とじっくり向き合うということが、特別支援学校ではできるのではないかと期待している。」「子どもたちと関わるなかで、嫌な気持ちや不安な気持ちにさせないかが不安です。」「特別支援が必要な子どもは、見たことはあるし、どんな特徴があるなど、勉強しているが実際に長い時間関わったり、自分が教えたりということ

をしたことがないため不安です。」「特別支援学校自体に行ったことがないため、授業で見た動画くらいしかイメージがないため、自分がやっていけるかどうか不安です。」「うまく児童と関われるのか不安。」などが記述されていた。

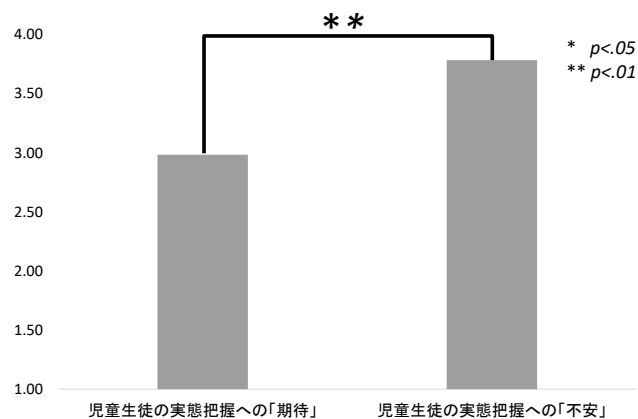


図 2 児童生徒の実態把握への期待と不安の差

図 2 より、「児童生徒の実態把握」では、「不安」が「期待」よりも有意に高かった ($p<.01$)。

記述内容には、「障がいにはそれぞれの特性があるなかで、その特性に当てはめすぎずどのような個性の子と出会えるのか期待している。」との「期待」がある反面、「知識、経験不足により実態把握が難しいのではないかという不安。」「2週間という短い期間で児童生徒の実態把握ができるのかが不安です。」といった内容が多く記述されていた。

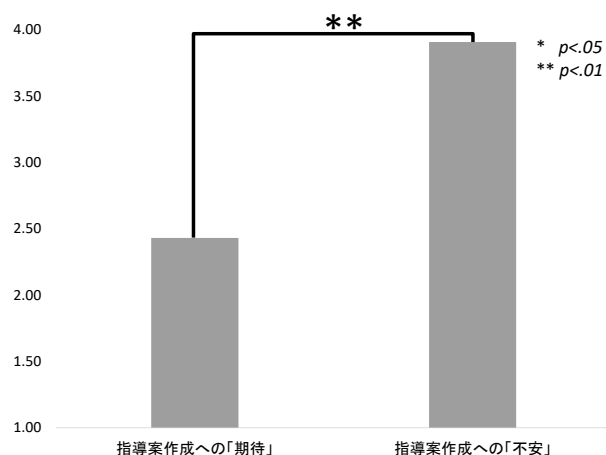


図 3 指導案作成への期待と不安の差

図 3 より、「指導案作成」では、「不安」が「期待」よりも有意に高かった ($p<.01$)。

記述内容には、「不安だができるようになりたいという期待もある。」「期待していることは、学習指導案を書く過程で、ひとつの授業の中にどのように一人一人の児童への支援を入れるかという、小学校とは違う

書き方を学ぶことです。」「小学校の指導案を作ることは今まで何度もしてきたが、特別支援教育の指導案は数える程しか作ったことがないので不安が大きい。児童の実態把握と合わせて、現段階ではよい指導案を作る自信が無い。」「通常小学校の指導案にはない個人の実態に則して書いていくというように違いがあることから不安がある。」「子ども一人ひとりの実態を把握でき、それを文で適切に表現できるかという不安がある。」など、小学校教育実習で書いた指導案との違いに対する不安が多く記述されていた。

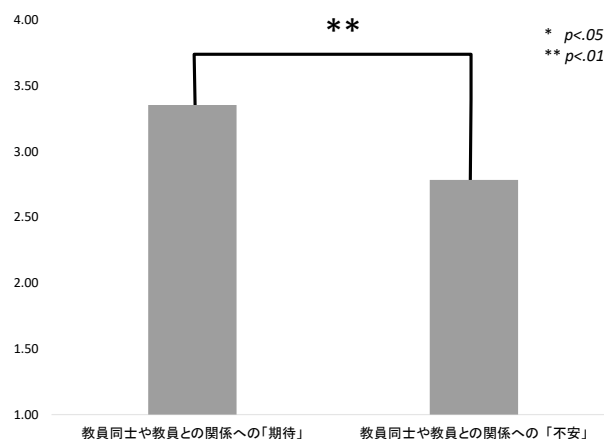


図 4 教員同士や教員との関係への期待と不安の差

図 4 より、「教員との関係」では、「期待」が「不安」よりも有意に高かった ($p<.01$)。

記述内容では「沢山の経験をしてこられていて、特別支援の観点で子どもたちといっぱい関わられている先生方なのでたくさん学びたいですが、お忙しい中で私がついていくことができるか不安に感じています。」「動画を見ていると、先生方が熱心に実習生と向き合いアドバイスを行っていたので、自分自身が大きく成長出来る場になりそうだと感じ、期待があります。」「期待は、特別支援学校で働いている先生の子もへの接し方や考え方を知ることが出来ること。不安は、知識も経験もない私を受け入れてくれるのか。」

「小学校の教育実習でも担当の先生やその他学年の先生に助けていただくこともありましたが、特別支援学校では TT を実践しているため、様々な先生から学べるのではないかと期待しています。」など、期待が大きいことがわかる。

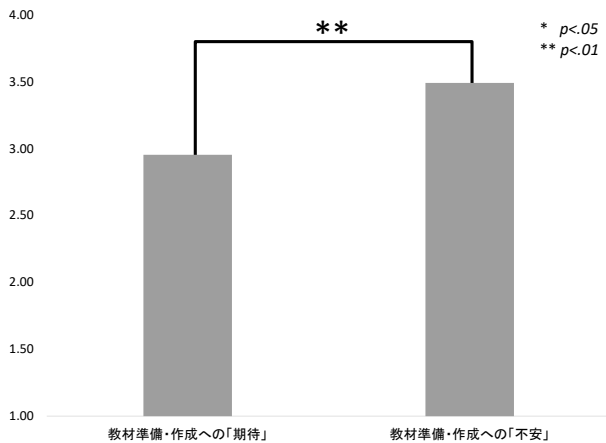


図 5 教材準備・作成への期待と不安の差

図 5 より、「教材準備・作成」は、「不安」が「期待」よりも有意に高かった($p<.01$)。

記述内容では、「作成して使ってもらえた時のことを想像するとワクワクする。それぞれの特性にあったり、実態を把握した上で必要なものだったりを考えて作成できるか不安。」「自分で作ってみるという経験ができるという期待と 2 週間という短期間で自分に準備が出来るか不安。」「実態把握の上にあると思うが試行錯誤する時間は好きなので不安よりも期待が多い。」

「面白そうと思う一方で、上手く授業に、活かせるかが不安。」「アイディアが思いつくか不安ですが、豊かな発想力を生み出せるだろうと自分に期待しています。」などがみられ、「指導案作成」よりも期待が高い。

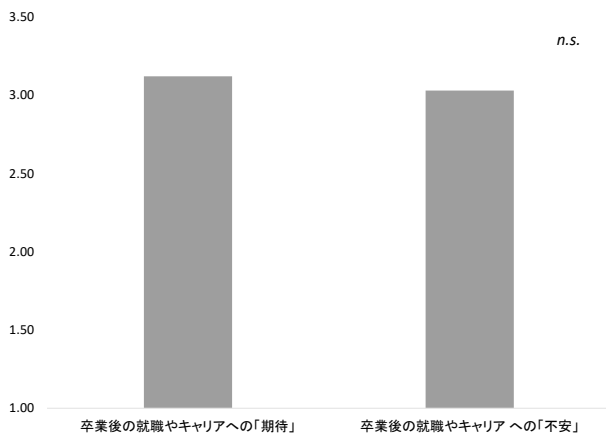


図 6 卒業後の就職やキャリアへの期待と不安の差

図 6 より、「卒業後の就職やキャリア」に関する「期待」と「不安」の間に有意差は見られなかった。

記述内容では、「とてもいい経験になると思っています。一人一人の様子をしっかりと見て観察眼を育てたいです。」「特別支援学校や特別支援学級で働く以外でも役立つことは多くあると思うので期待の方が大き

い。」「期待と不安は同様にありますが、この実習が終わった時には考え方も色々に変化していると思うので、まずは乗り越えることを頑張りたいです。」「通常の小学校の教員になる予定ですが、特別支援の免許をもつこと、勉強をすることで、視野・考え方が広がったり、子どもたちに対する接し方がよりいいものになったりすることを期待している。自分の将来の進路にとって、良い経験となると考えると同時に、そうできるように主体的に学んでいきたい。」「自分がきちんと就職することができているかが不安です。」「不安は、本当に就職できるのかと本当にこの職業が自分に合っているのか、やっていけるのかなどです。」のように、特別支援学校での体験を今後に生かしていこうと考えている姿と共に将来に対する漫然とした不安な気持ちが読み取れる。

5. 考察

本研究では、特別支援学校教育実習に対する事前のアンケート調査より「不安」は「期待」よりも明らかに高い結果であった。アンケートを作成したことにより項目ごとの「期待」「不安」を数値化することができた。実習終了後にも同じ質問項目での調査を実施することで、特別支援学校教育実習を経験して、実習生の何が変わり、何を学んだのかを明らかにできると考える。自分が実習前に感じていた「不安」がどう変化したか、実習の成果について、今後の自らのキャリアにどのような影響があるかを問い、分析を行うことで授業改善へとつなげていきたい。

「実態把握」「指導案作成」に表れている不安は、実態把握と指導案作成につながる体験の未経験が影響していると考えられる。机上での学びだけでは児童生徒の様子をイメージすることが難しいのだろう。今後、学生サポーター制度などの学校体験活動で体験した児童生徒の様子に基づいた、指導のめあて、指導内容や指導方法といった指導案作成に関わる内容を授業内で扱うことが、授業準備としての本時の流れを計画することや個に応じた支援を考えることができる力を育てると考える。

次に、「教員との関係」について、他の質問項目はすべて「不安」の方が「期待」よりも有意に高かったが、この項目だけは「期待」が「不安」よりも有意に高かった。「期待」得点は他の項目とそれほど変わらないのだが、「不安」得点が低いために有意な差が出たと読み取ることができる。チームティーチングで多くの先生方と接することや、昨年度の先輩たちの実習報告で先生方からの手厚い指導を受けられたとの動画を視聴したことによる期待もあると思われる。

また、本調査対象者の 7 割以上が 4 月の時点で一度も特別支援学校に行ったことがないと回答している。今後、介護等体験実習が特別支援学校で実施されるよ

うになると思うが、文部科学省は介護等体験実習を特別支援学級での実習も認めている。現場での体験から得た児童生徒の様子を授業準備に組み入れていく大学での演習が必要になってくる。

鎌田ら(2019)は、指導案作成の演習を複数の特別支援教育に関する科目に割り当て、関連付けて指導していることを報告している。また、教育実習評価票の分析、実習日誌に書かれた指摘事項の分類から実習生に必要な教育実習事前事後指導を提案している。

6. まとめ

新型コロナの影響で、教育実習まで一度も特別支援学校に行ったことがない学生を特別支援学校教育実習に送り出さなければならない。特別支援学校に対するイメージ、特別支援学校に在籍する児童生徒のイメージなど体験したことがない中での教育実習に対する不安はとても高いものがある。今後、学校公開週間やバザーなど学生が入校できる機会を紹介したり、学生サポーター制度の利用を促したりすることで教育実習前の未経験からくる不安を軽減させることができるだろう。しかし、体験して知ることによる新たな不安も生じるであろう。実際の体験を大学での授業内で教材化することによって、特別支援学校をより身近に感じられるよう授業改善を行っていく必要があると考える。

7. 文献

- 藤瀬教也, 吉川寿美, 岩男英美(2023)「特別支援学校教育実習の実態と課題」『第7回中村学園教職教育研究会』33-38.
- 池田浩明, 小川透, 武石詔吾(2012)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)―教育実習担当指導教員へのアンケート調査から―」, 『藤女子大学紀要』49 第Ⅱ部, 85-89.
- 池田浩明, 小川透, 武石詔吾(2013)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(2)―実習校校長及び教育実習担当指導教員へのアンケート調査から―」, 『藤女子大学人間生活学部紀要』50, 89-93.
- 鎌田義彦, 石黒栄亀, 堀江幸治, 高良秀昭(2019)「4年次特別支援学校教育実習への対応と課題～教員の資質能力の視点から～」『九州女子大学紀要』56, 2, 153-164.
- 今野邦彦, 池田浩明, 小川透(2016)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(3)―教育実習担当指導教員へのアンケート調査から―」, 『藤女子大学人間生活学部紀要』53, 73-80.
- 今野邦彦, 池田浩明, 小川透(2018)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(4)―文章記述からみた課題の分析―」, 『藤女子大学人間生活学部紀要』55, 95-100.

矢野口仁, 小島哲也, 小林敏枝, 内藤千尋(2021)「教育学部教職支援センターにおける特別支援学校教育実習の取り組み―実習受入校へのアンケート調査による評価と対応―」, 『松本大学研究紀要』

19, 73-82.

「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成 コミュニティの構築に向けて～」2015年12月 中央教育審議会答申

「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」2022年12月 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課

「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告」2022年3月 特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課

「特別支援教育資料(令和3年度)」2022年11月 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課